

---

# 道は一つしかなかった

須崎杏子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道は一つしかなかつた

### 【Z-コード】

Z5282E

### 【作者名】

須崎杏子

### 【あらすじ】

売られた双子。召使として生きていた。しかしある日とよつて召使から開放されたが

……お母さんなんて嫌い。なんで私たちを売ったの？

「「めんね」

お金がなかつたから？ 醜かつたから？

「「めんね」

ほら、この言葉。そんなこというなら売らないでほしかったのに。

オ母サンナンテ嫌イ

「ん……」

今日の夢見は悪かつた。小さこときの夢。恋々しい記憶。

「おこ」

「あ、ネオ。ちょっと今からこっから

そんなこと言つてこるとネオは出て行つた。

「ほら、こんどはあっちの広場ー！」

……なんで私達はこんな人に売られたのだろうか。荒々しい。

「……」

ネオなんて嫌がつてゐる。本当は裕福な暮らしを望んでいた……。でもそれは昔のこと。どうにもできない。

そう思つてこらつてここネオは広場へ出て行つた。

「ぐずぐずしてないで階段を掃除しておいでー。早く戻つて来て。ネオ。

階段の掃除は終わった。だけど妙に遅い。もう終わっているはずなのに……。

「……心配だなあ」

私はネオの元にいった。

「ハア、ハア、ハア……」

ネオの息を吐く音が聞こえる。そんなはずは無い。いつもはすぐ

に終わつたはず……。

「……！？」

私は信じられない光景を、目にした。

「ネ……オ……？」

手元には、先のない先端が尖つたほつきの棒。赤黒い、鮮明な血が付着していた。

その横には若くはない女性の死体。胸元からじわじわと血が出てくる。まだ生きている。

「ネオ……貴様……」

「死ね」

冷たく、残酷な感じがした。おそらくネオはこの女性……。いや、私たちを召使いにあつかつていたおばさんのが凄く氣に食わなかつたのだろう。

「グツ」

足を手に、動けない状態にして脳を貫いた。おそらく死んだだろう。ネオはそれ以上は用が無いとし、棒をそちらへんに捨てて逃げた。私を置いて

私は掃除した振りをした。その後、私は引き取られた。けど運  
良いい人だつた。

「大丈夫？ 恐くなかった？」

「うん……」

でも他の人は私を殺人鬼だと思つてゐる。だつて近くを掃除して  
いたもの。そう思われても可笑しくは無い。

「ネオつていう男の子知りませんか？」

「知らないわよ？ 家族なのかな？」

「うん……。売られた身だからお母さんはいなけれど」

「大変だつたわね……」

私はうれしかつた。ただ頼れるのはこの人のみだつた。

「お母さん置いてかないで」

私は大泣きする。でもしらつとした顔で置いていった。お母さん  
は私を愛してくれなかつた。もちろんネオも。

「お母さん、お母さん……」

何度も呼びかける。が、聞こえていない振りで去つていつた。隣  
にいたネオは追いかけていつた。だけども追いつけなかつた。

理由は簡単。あの女性が私たちを引きとめたから。

「なんで……」

今までお母さんが好きだつた。けど気持ちは憎しみに変わる。

「おかあ……」

……またか。何度あの夢を見たか。

「おはよ」

「あ、おはよ「ひ」ぎわいします」

私はおばさんに挨拶を返した。おばさんはメモを渡すなり  
「買っててくれる」  
といった。こここの街は慣れていないけど店の場所ならすぐわかつ  
た。

「えっと人参、じゃがいも……」

作るのはカレー。なぜかりんごも買つ。

「これとこれとこれをください」

お金を渡し、家に帰る。しかしあをみた時、異様な感じがする。  
家のガラスが割れているのだ。

「何があつたんじゃあ……」

家に入つたら荒れていた。そして赤黒い何かが見えた。

「え……」

人參とじやがいもや玉ねぎを落とす。その弾みにりんごが赤い赤  
い水溜りに落ちた。

忌々しい記憶と恐怖がよみがえる

「おばさん……」

胸からでた血は止まっているか、脈はあるか。探つてみたが後の  
祭りだった。

「強盗が入つたんだって」

近所の人はそのことをいいあつ。

「もしかしたらあの子かも知れないよ

「ありそつよね、そういうこと」

「恩知らずの子よね」

醜い汚い心の大人が耳で言いあつ。なぜ私は不幸なんだろう。私

はしていません。って言つ勇氣はない。

「あの子が災いを引き起してゐるじゃないかしら「私はその言葉を聞くと走つて逃げた。ちがつから。私を生んだお母さんが悪いの。」

「つるせえ！ こちちは腹すいてるんだよ。」

私は席に座つて何かを注文した。パンだ。

「お客様。ここは店なんですから、お金を支払つてもらわないと……」

「そんなもん持つてねえよ」

「なら働いてそのお金の分返してもらいますよ」

「かたつぐるしことできるか」

「こんな言葉が続いている。だれがこんなことをしたのだろう。答  
えは、私のよく知つてゐる……」

「お、ネ!!。金貸してくれ」

ネオだった。いつもどおりに振舞う。

「いやよ。このお金は大切に使うの。ただ食いなんかした人に貸せ  
られるわけないもの」

「お願ひだ」

「……何円」

「180円」

「わかつたわよ」

袋から180円を取り出し渡す。

「ありがとな」

払いに行くネオ。なんだか私まで恥ずかしい。

「なんであんなことしたの」

「いや、お腹へって

「～～～つだからってただ食いはしないのー。」

私もいつもどうじこしてこる。

「なんていなかつたの」

「いや、おばさん元に命令され……」

「嘘つや」

私は、もうこつた。彼は戸惑つ。

「そのおばさんを殺したのじょいへ。増えて、悔しくて、悔しくて」

「……つるせえ……」

私を突き飛ばし、逃げていった。

「……本当のことじつてよ」

そこにネオは、もういない。

「痛つ」

足を軽く打撲した。けど長距離歩くには不利である。私はある一軒の家に寄りかかる。

「はあつはあつ」

今までにたまつた疲れが一気にでる。とにかくチャイムを鳴らしてみる。すると誰か出てきた。

「ん？ 誰？」

「や、休ませてください」

とにかくそうこつた。

「足、紫色になつてゐるし……。よしー。じつに来てー。」

足を引きずりながら家の中にまつた。

「このソファーで寝てて」

ふかふかのソファー。そこに寝転び、次第に意識が吹つ飛んでいく。つた。

「お母さん」

そこにはもう人間ではなくただの肉の塊があった。

「お母さん」

私が殺した。原形が無いぐらいに。

「お母さん」

また、返事をしてくれない

今朝はいつにもまして夢見が悪かつた。

「おはよーっ」

「おはよっ……」

そういえば名前を聞いていたが、名乗つてもないから毎晩おひるおひるをしていたけど相手が先だつた。

「君の名前、なんていうの？ 私はマナよ」

茶色い長い髪を三つ編みにしている。頭止めがよく「あつて」とい。

「私の名前、ネミともうします……」

「かしこまりなくていいよ。なにしてたの？」

「ある人をさがしていたの」

眠いのを抑え、そういった。

「あ、そうなの？ がんばれ！ 足もけつこつよくなつたよ」

いや、良くなは無い。腫れています青紫色……。

「で、何があつたの？」

「それは」

今までの話をマナにいった。そして

「私に残された道は『死』しかないの」

「なんで？」

「それが……私に残された道だから。開放と自由という道なの」

「そんなの間違っているよ」

だけどやつぱりそれしか道がなかつた。マナは必死に引き止めていたけど……。

「んじゅあ……あつがとつ

「もうこくの——? まあいにかど」

どつちなの。そういうたくなる。

「おおびこじれ……」

朝食代をマナに投げて送る。

「うん!」

足を引かずりはしないものの、まだいたい。どこかへ川のそばで  
いくだな。

「毎度あつ

ナイフを買った。生活に必要なものだから。

「なにか川を越える場所ないですか

そうきいたら定員さんは

「あの道具屋のそばに橋があるよ」

と答えてくれた。

「ありがとうござります

あとは川を越える。

川が見え、橋があつた。しかし異変があつた。ネオがいるのであ  
る。

「!」

ネオは逃げよつとした。が、私は呼び止める。

「逃げないで」

「なんでだよ」

そろそろと後ろにむがるネオ。

「私とネオは……ここで死めるの」

死んだほうがましだから……。

「俺は自由に生きるんだ」

そういってまた逃げよつとした。けど袋が引っかかり逃げること

ができない。その間私はナイフでロープを切る。

「あ……」

橋は崩壊し、転落する。ネオはロープに必死につかまっていた。けど力尽きてしまった。

激流の川の水。助からない。意識が朦朧とした。

## コレゲ自由二ナレタ

「なにか一人水死体があつたそよ

「橋の崩壊かあ」

マナはその話を聞いた。そこで思ったこと。それは

『それが……私に残された道だから。開放と自由といつ道なの

ネミがそういうことを思い出した。

「あれほど死ぬなって言ってたのにね……」

だが、それはネミにとって望みたくもなかつたことではないが。マナはそう思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5282e/>

---

道は一つしかなかった

2010年10月8日15時20分発行